

のではありません。

ストッキングを顔に押し当てながら、みつるはジーンズの尻ポケットに手を入れて、皺だらけの封筒を指先でなぞりました。みゆきに渡せずにいる遺書でした。

そもそものはじまりは、聖書だった。みつるはそう書いています。

時間つぶしに本屋に入ったある午後のこと。たまたま目の高さの棚にあった聖書を引き抜いたとたんに、削岩機でえぐられるような振動が脳髓の奥に走ったといいます。そのままからだが四方八方に飛び散るのを防ごうとするように、聖書を鞆のなかに押しこみました。持ち帰った聖書を枕もとに置いただけで、いやおそらく、地震で倒れてくるのを防ぐためにクローゼットの下に敷いておいただけで、別人になったように寝つきがよくなったことにもつるは驚いています。とりわけ助かったのは、食事の時間とトイレに入っている時間でした。子どもの頃から、みつるはそれらの時間について慣れることができなかったようですね。ひとり暮らしをはじめてからというものの、食事は台所でたったままかきこんですませていたし、トイレはせいじいっぽい我慢をしておしたあげくに駆けこみ、逃げだすようにできていたらしい。それが一変したのです。最小限に抑えていた食費は、たちまち貯金を切り崩さなければならぬほどかさみだし、生まれてはじめて料理をする習慣がつくやい

なや、すこしでも時間が空くと、なにをどうやって食べるかというヴィジョンを頭のなかで組みたてることに没入するようになりました。排泄の時間は食事の延長のようなものだから楽しむべきだと思いついて、テレビや本やCDを持ちこみ、トイレをリビングルームに模様替えしてしまいました。生活が楽になったのは聖書を盗んだおかげです。みつるは毎晩聖書に手をあわせ、感謝の祈りを捧げたそうです。

会社の帰りにわざわざ逆方向の電車に乗り、てきとうに降りた駅の近くの本屋で聖書を一冊万引きしてから帰途につく、そんな暮らしのはじまりでした。手に入るかぎりの種類の聖書が、豪華な挿絵がふんだんに添えられたものから、漫画化されたものや子ども向けにノベライズされたものや注だらけの辞書みたいにぶあついものまで、ダンボール箱なん箱ぶんもたまつていきました。ところが出費がかさんだある月に、みつるは思い余って、さいしょの一冊以外のすべてを古本屋に売り払ってしまいます。換金したその夜から寝つきが悪くなり、汗びっしょりになって自分の叫び声に目を覚ます日々がつづきました。聖書を盗むことにはなんのためらいもなかったみつるを、売ったことへの後悔が苦しめたのです。

睡眠や排泄や食事に喜びをとり戻させてくれたのは、聖書を盗む行為そのものではなく、盗んだ聖書を手もとに置いておくことだったのだ。そしてそれは、聖書である必要す。きになかなければなりません。そんなふうにして、盗みに明け暮れ、盗むためにまた盗む生活をつづけていったのです。

「読めた？」

みつるの腕のなかに倒れこむように、奈緒は身を寄せてきました。白い手がショルダーバッグからちいさなカメラをとりだすのを見届けてから、みつるは軽く脇を開きます。自動販売機の陰で、互いのからだに腕をまわしあったような格好のまま、奈緒はシャッターを切っていきました。背中のすぐうしろを通り過ぎていく夕暮れどきの人波がみなこちらに目を向けているように思えてならず、みつるは粘っこい汗がからだを伝うのをこらえます。

「いや……まだ」

「は？ 何日かかってんの」

「あのさ、無理だと思っただよね。おれ英語とかぜんぜん」

「行くよ」

カメラをしまった奈緒は、みつるのコートの肘を掴み、足を踏みだしました。すっかり陽が落ち、店の明かりも、嬌声や呼びこみの声や笑い弾ける声も、それらをかき消すほどのおおきさの電子音の洪水も、いっそう激しさを増していました。思い思いの方向から現れ、たちどまり、向きを変えるひとの流れにぶつかることもなく、奈緒はちいさ

すらないのかもしれない。気がついたみつるは、仕事の行き帰りに、昼休みに、通りがかりに入った店で、そのためだけに調べて行った遠くの街の店で、駄菓子から貴金属からペット用の爬虫類にいたるまで、手あたりしだいに盗みまくりはじめます。なにをいつどこでどうやって盗むか、つねに綿密な計画をたてなければなりません。計画が崩れたときのために、一瞬の判断力も必要になってきます。生活に必要なものはなんでも盗めばいいと、会社もやめてしまいました。

起きるのは始発電車の動きだす頃。慌てて身じたくをすませ家を飛びだすと、コンビニで万引きしたもので朝食をとりながら、公園のベンチで地図を広げて計画を練ります。めどがたつと、前を歩く乗客に張りつくようにして改札をすり抜けて電車に乗りこみ、山手線を何周もまわるあいだに陽が高くなるのを待ちます。やがて狙いをつけた駅で降りると、商店街を歩き散らしてあちこちの店からすこしずつ商品をせしめ、家をでるときには空だったバッグがいっぱいになるたびに荷物を置きに帰るのです。それを二、三回繰り返す頃は夕方になってるので、見晴らしのいい高台に陣どつて万引きした惣菜を着に万引きしたビールを流しこめば、あとは寝に戻るだけ。部屋の中はやがて潜水艦のなかのように狭く薄暗くなっていきました。整理もせずに片端から壁ぎわに積みあげていく万引き品が落ちてこないように、それらを支えるためだけのものをまた万引

な雑貨屋の並ぶ小路に入っていきます。すぐに枝道へ折れ打って変わってひと気のない通りを進んで、明かりの消えた雑居ビルのすきまに半身をすべりこませました。いきなり肘を離されつんのめりかけたみつるをさらに奥へ押しこむように肩を押しつけながら、奈緒はふたたびカメラをとりました。

百貨店の入り口へつづく階段をあがる女たちの、ミニスカートやショートパンツから伸びた脚や、透けてみえる下着の線や、俯いてスカートについた糸屑を払っている女のおおきく開いた襟もとからのぞく胸の丸みや、歩きながらものを食べている女の唇が写された画像を、奈緒は素早くチェックしていきます。

「でもあなたのやっておりますことって、そういうことじゃない」「どういふことだよ」

「読めないものを読めたことにしているようなもんじゃない」

「比喩が……よくわかんねえ」

撮ったばかりの画像をひととおりチェックし終えると、奈緒はカメラの表面を爪で叩きながら通りのようすをうかがいはじめます。

汗と香水の入り混じったにおいが、みつるの鼻をくすぐりました。はじめて奈緒と会った日も、言葉を交わす前に同じにおいを嗅いだことを、みつるは思いだしました。渋谷で電車を降り、細かい雑貨などを万引きしながらセンタ

ー街を流して歩いてみると、真正面からまっすぐ近づいてきたのが奈緒でした。記憶を探ってみたものの、切れ長の大きな目に重なる目はひとつも浮かんできません。気がつけば息がかかるほど近くまで顔を寄せていた奈緒は、みつるの腹になにか硬いものを押しあててきました。手のひらにすこし余るほどのおおきさの、薄いカメラでした。ファインダーに写っていたのは、みつるの画像です。棚に並んだアクセサリーのなかから、指輪やネックレスをポケットに滑りこませている瞬間が捉えられていました。いつシャッターを切られたのか、思い返してみても見当もつきません。あつけない幕切れに逃げも抵抗もせず、みつるは腕を引かれるまま足を踏みだしかけました。ところが、奈緒はその場から動かず、みつるの脇からカメラを覗かせ、たてつづけにシャッターを切っていきます。レンズの先には、ゲームセンターの前で溜まっている女子高生たちの姿がありました。

万引きの件は誰にも黙っておくから、代わりに撮影を手伝うように。有無をいわさぬ調子で、奈緒はそっくり渡したそうです。半年以上が経つても、名前よりほかのことは住んでいる場所も連絡先もふだんどんな生活をしているのかも、ふたりは互いに知らないままでした。

「そういうところがさうだっついてんの」

「とにかく無理だよおれには」

「ちよつと貸してみなつて」

みつるはジャケットの内ポケットをまさぐり、盗ったばかりのアクセサリーを掻き分けて、一通の封筒をとりだします。ふたつに折り畳まれた分厚い便箋の束を引きだすと、陽褪せしてところどころ茶色くなった白無地の紙のいちめんに、筆記体のアルファベットが踊っていました。

「英語じゃないみたいなんだよね」

「じゃあなおさらわかんねえよ。大学の教授とかに頼んだら」

「あたしにそんな知りあいいるって本気で思っつんの？」

「本気じゃあない」

「あのね。あたし、遊んでる時間とかないの」

奈緒は子どものように首を振りまわします。肩先で切り揃えられた髪が揺れて広がりました。

「真剣なんだよ。あんたならできるでしょ、これくらい。やらないつていうなら」

奈緒はカメラの画像表示ボタンを素早く押し、雑貨屋のなかでピアスを見つめるみつるの横顔を表示させます。

「わかった。わかったよやるよ」

「しっ。来た」

奈緒に身振りうながされ、みつるは封筒をしまい、壁に背をつけて通りをうかがいます。繁華街から何本か通りを隔てただけで明かりも喧騒も届かない通りの奥から、建物のなかで反響しているような甲高い話し声と靴音が漏れてきました。やがて扉の開閉する金属音が響き、話し声が

近づいてきたかと思うと、突きあたりの丁字路に、繁華街のほうへ移動していく女たちの姿が現れました。奈緒はシャッターを切りはじめます。大通りに面したファッションビルの裏の社員通用口からでてくる、販売員の女たちでした。

みつるが奈緒から遺書を渡されたのは、その数週間前のことでした。みつるとも奈緒ともまったくかわりのない他人の、外国語で書かれた遺書でした。

代わりに持っていてくれるだけでいいから、と渡されたものの、部屋に置いておくのも薄気味悪く、棄てるわけにもいかず、いつも持ち歩いていると漏らしたところ、それならなかみを読み解いてほしいと奈緒は迫り、いらい会うたびに、行方のわからなくなった家族の安否を尋ねるような口調で、解説をせつづくのでした。

遺書を返してしまうなり、解説の要求を突っぱねるなり、することもできたはずですが、ところが、手の脂が染みこみ擦りきれかけた封筒を何度となくひねくりまわしているうちに、宛名の主のもとへ遺書を届けにいくという考えが浮かび、それはおそらく、なによりも困難なものを盗む計画をたてているときよりも、みつるの胸を躍らせたのでした。アルファベットの文字で宛書きされていたのは、シマザキミュキという女の名前でした。どこの国のものかもわからない言葉で書かれた遺書は、どうやら日本人の女性に宛て

られてはいるらしいのです。さらに、まったく意味がとれないながらも繰り返し繰り返し遺書の本文を目で追ううちに、見覚えのある単語をみつるは幾つも見いだします。いずれも、日本国内の地名や日本人らしい人物の名前でした。パズルを解くように、それらの固有名詞から、中央線沿線の駅の名前と駅前からほど近い喫茶店の名前を探りあてると、みつるは数日おきに顔をだすようになります。やがて口をきくことになった店主の名前が、他ならぬみゆきでした。

みゆきに遺書を渡してしまおうかと、みつるは何度も迷っています。果たせずにいるのは、奈緒に万引きの現場写真を握られているからというだけではおそろくありません。小学生の頃に読書感想文がコンクールに入選したことを、みつるは覚えていてでしょうか。入選者の名前が学校で発表される前日に、じつは家にあつた週刊誌の書評を書き写しましたと、教師に告白をしいったのです。全校生徒に発表されることはとり消しになったものの、よくほんとうのことをいった、と職員室の教師たちからは褒められたらしい。そうして褒められたいがために書評を書き写したと嘘をついたのであって、感想文は自分で書いたものだったのですが。

細長い裂け目のかたちをした池のふちを辿り、ねじれた幹の黒々と連なる冬枯れた桜の木立ちをぬつて、みゆきはうしろで束ねた髪と白いマフラーを揺らしながら、ブーツ

の踵でペダルを漕ぎ、器用に自転車を走らせていきます。荷台に腰かけ、サドルのうしろに両手でつかまったみつるの顔がコートの背に触れるたび、みゆきの体温が伝わってきました。公園を出外れて、池から伸びた川沿いの遊歩道の途切れるあたりまで進んだところで、みゆきは自転車を停めました。

「すいませんわざわざ。方向逆だったのに」
「とんでもないです。こちらこそ、せつかく来ていただいたのに。こっちのほうって、はじめて来ました。駅からあんまり離れてないのに、静かなんですね」

みつるが荷台から降りても、みゆきはしばらく目を細めてあたりを見まわしています。みつるが喫茶店に着いたとき、みゆきはちょうど店を閉め終わって自転車をだしていたところだったのです。夫がはやく帰ってくるようになったので、家事をしに戻らなければならぬから、と何度も謝ってから、サドルのうしろを叩いて、乗ってきます？

と笑いかけてきたのです。

「もう長いんですか？」
「わたし？ ここに？ 結婚してからだから、まあ、もうけっこう経ちます」

「いいですね、このへんは。店も多いし、公園もあるし、ちよつとはずれるとこんな静かなともあって」

「いいところですよね。えっと、じゃあ、わたしそろそろ行きます」

みをして目をしばたきました。

「南アフリカで使われてる言葉らしいよ」

奈緒の隣で、みつるはポケットから遺書を取りだします。通りには、着ぶくれたひと群れがいつぱいに広がっていました。紙袋を提げ、連れの手や袖口を引いて、思い思いの表情を浮かべながら、誰もが脚だけは気ぜわしげに先へ先へと送り、流れていきます。

「検索したらでてきたんだっけ」
「とりあえず単語を幾つか拾って、入れたらできた」

「最初っからそうしなよ。ってかどっかのサイト使えば、ぜんぶ翻訳できるんじゃない？」

「じゃあ自分でやれば……」
「あたしにそんな暇はない！」

「やってもいいんだけどさ、手書きだからアルファベット自体なんて書いてあるのか」

「でも、何個かは読めたんだよね」

「ああ。日本語もあつたよ」

「日本語？」

げげんな顔を向けてくる奈緒に、みつるはすでに遺書の宛先人であるみゆきを訪ねていったことが何度もあると告げました。遺書から拾った日本語らしき単語をもとに、中央線沿線の駅と喫茶店をつきとめていらい、週に何度かは顔をだし、平日の午後など、他に客のいなくなるときにはあれこれ話しこむことも増えてきたと。

「ああ。あの」
「はい」
「なんでもないです。またコーヒー飲みにいけます」
「ありがとうございます。じゃあ」
軽く頭をさげると、みゆきは自転車を押しもときた方へ歩き去りかけましたが、ふいにたちどまり、肩越しに振り返って、

「わたし、こういうの弱いんです」
と笑いかけ、もういちど頭をさげて、自転車に跨りました。

みつるがはじめて遺書を渡そうとし、でも渡せなかったその日の夜でした。

長く高い塀に目隠しされた、みゆきのマンションの駐輪場に、みつるは忍びこみました。みゆきの自転車を探しだすと、みつるはサドルに手をあてて、すでに冷えきってしまったっているシートを、あたたかくなるまでさすりつづけました。人肌ほどにあたたまったところで、みつるはサドルに頬を寄せ、長いあいだ目をつぶっていたそうです。

みつるは思いましたでしょうか。

覚えていますか、お姉さん、あの頃、ぼくはいつも、みつるを自転車のうしろに乗せていたものでした。

「アフリカンス語、か」

自動販売機の陰でビルに凭れかかったまま、奈緒は腕組

「ちょっと待った」

奈緒はバッグから手帳とペンをだし、みつるに押しつけてきました。眉根を寄せて顔と手もとを交互に見つめてくる奈緒にうながされ、みつるは、みゆきの名前と、中央線沿線の駅名と喫茶店の名前を書きだします。

「早くいいなさいよそういうことは。やればできるじゃない。どんなひと？ 遺書のこといった？」

「いってないよ」

問われるがままに、みつるはみゆきについて知りえたことを話します。年齢はみつると同じくらい少し下に見えること。義母の経営している喫茶店の店主をしていること。喫茶店の近くのマンションで夫と義母と暮らしていること。「うん。うん。それで？」

奈緒は焦れたような声をあげ、みつるから手帳とペンを奪いました。すぐにペンを動かかし、なにか書きつけると、また返して寄越します。書き加えられていたのは、みつるが話したばかりの、みゆきにかんすることでした。

「なんだよこれ」

「みゆきってひとの名前と、喫茶店とか駅の名前が書いてあったんだよね、遺書に。ってことは、この話も書いてあるかもしれない」

「かもしれないけどさ。メモってどうすんの」

「夫の母親と同居してんだっけ。ふうん」

「なんか急に楽しそうだな、奈緒さん。ものすごく」

ちに汗に濡れてく彼の背中に、さすがにみゆきも胸がつつたのではないでしょうか。足の下を通り過ぎていく地面に、硬くこわばっていた気持ち削られ、風にさらわれ飛び散ってしまいそうで、みゆきは腰にまわした手に力をこめました。そのうち彼がなにかしゃべってききましたが、声が頭に入ってこず、何度も聞き返していると、彼がうしろを振り向いた拍子に、とつぜん激しく頭が揺れ、みゆきは宙に投げだされました。タイヤが石にとられ、土手の上から滑り落ちてしまったのでした。

幸いにもみゆきが倒れこんだのは草の上で、かすり傷ていどですみました。すぐそばに倒れている彼を見て、しばらくはなにが起ったのかわからなかったかもしれません。車体からだを引っかけたまま落ちていった彼は自転車に覆いかぶさるように倒れていて、服も破れて赤く染まっていたのです。

「それ以来夫は、片足を引きずって歩かなきゃならなくなつた。なにしてんの。書くんだよぜんぶ」

みつるの開いたままの手帳を、奈緒は平手で叩きます。「書いてるって」

自分で話した内容を、みつるはメモにとりつづけます。手を動かすうちに、みつるの頭にはまた、幾つかの単語が浮かび上がりました。みつるはそれらを手帳の隅に書きとめます。

「病院……ヨハネスブルグ……自転車……医者……なにこ

「あたしの反応はいいから。あとどんな話したの」

「ダンナさんとは幼なじみだっけって。あ」

「どした？」

「たまたまかもしれないけどさ」

みつるは思いだしました。遺書のなかから幾つか拾い、翻訳サイトで検索した単語のひとつが、幼なじみ、だったのです。

「じゃあそれも書きなよ。早く」

腕組みをする奈緒の前で、みつるは幼なじみ、と手帳に書き加えます。家が近くて親どうしも仲がよかったから、夫とは兄妹みたいに、ご飯食べる学校に行くのも、一緒に育ったんです。みゆきの声が耳の奥でふくらみました。ほんとならあたしたち、そのままずっと一緒にいるはずだったんですけど、まわりもそう思ってたと思うんですけど、高校を卒業するときに、あたしそのレールから降りちゃったんです。みつるが喫茶店に通いはじめて数ヶ月後のある午後、みゆきはぼつりぼつりと打ち明けたそうです。幼なじみの夫と同じ大学とべつの大学と、両方に受かったみゆきは、べつの大学のほうを選んで、離れた街でひとり暮らしをはじめたいといいました。

部屋も決まっていよいよ引越す前の日に、彼から散歩に誘われました。一緒に学校に行くときにずっとそうしていたように、自転車にふたり乗りをして、河べりに行ったのです。まだ薄ら寒い春の日だったでしょう。漕いでるう

れ」

「全体的にはまったくわからなかったんだけどさ、ところどころ、英単語が混ざってる」

「遺書の話ね。たしかに、これくらいなら中学生にもわかるよね」

「そこ笑うとこじゃねえし。もともと英語と近い言葉なのかも」

「病院、か。夫は入院することになった。そのあいだみゆきさんはつきっきりで世話してた。退院後も、夫の母親が経営してる喫茶店にしょっちゅう顔だして、皿洗いとかトイレ掃除とか、彼の代わりに手伝ってた。そのうち夫からも母親からも頼りきられるようになって、せっかく受かった大学を蹴って、アパートも引き払っちゃって、夏前には籍を入れた」

「なんだよそれ。なんでわかんのか。みゆきさんがいつたとおりでだよ」

「想像。で、いまは？」

「ダンナの両親はだいぶ前に離婚してるんだけど、父親が医者で、毎月けっこうな額が振りこまれてくるんだって。それでダンナは毎日のように遊び歩いてる。ダンナの母親も喫茶店をほとんどみゆきさんに任せて、自分は習いごとやなんかでほとんど家にいないらしい。みゆきさんはもう長いこと、喫茶店と家事と、だけの暮らしをしてるみたいなんだよね」

ちゃん腕あげたねー、とかいいながら、みゆきさんのぶん

までたいらげちゃうんだよね」

「見てきたようによくいうね」

「なくなったのって、サドルだけだったの？」

切れ長の目を大きく開き、奈緒はみつるの目をじっと覗きこんできました。

「他にも、買ったばかりのストックキングとか、口紅とか、コンタクトレンズとか、汚れたハンカチとか、食べかけの菓子パンとか、爪切りとか、箸とか、スプーンとか」みつるは言葉を絞りだします。喉がからからに渴いているのがわかりました。「料理のときみたいに勝手に片づけられたんだと思って探してみても、ひとつも見つからないって」

「ふうん。そういうことか」

奈緒はみつるの手から手帳を奪い返しました。なかみにさっと目を走らせ、手帳をバッグにしまいかけたかと思うと、もういちど開きます。みつるの書いた二、三枚のペー

ジを破りとり、押しつけてきました。

「次までに、つづき、書いてきて」

歩きだしながら片手をあげてみせる奈緒の背中に、みつ

るは慌てて問いかけます。

「あのさあ、そろそろ教えてくれよ。これ誰の遺書だよ。なんでおれが」

「あんたは、いわれたことだけやってりゃいいの」

奈緒は横顔だけで振り返り、唇を持ちあげてみせました。

「自転車か。なんか心当たりない？」

奈緒はみつるの手もとを覗きこんできました。

「そーいや……今朝、店に行こうとしたら、自転車のサドルがなくなってたんだって」みつるは口ごもりながら答えます。

「サドル？」

「自転車の、座るところだよ。そのへんを探してみても見つからないし、駐輪場は塀でも乗り越えないと入ってこれないはずだから、いたずらだとしたらマンションの住人しかありえないって、薄気味悪くなって管理人室へ向かおうとしたとき、中庭越しに、窓の奥からこつちをうかがってる気配を感じたんだってよ。ダンナの母親がやったんだって、みゆきさん確信したらしい。台所で料理してるときなんか、いつの間にかうしろからじっと手もとを見られてる、なんてことが、ふだんからよくあるんだって。家事に口だしされることはないらしいんだけど」

「口だしはしないにしても、みゆきさんが料理してるあいだに、そのへんにだしっぱになってる菜箸とか包丁とか小皿とか、ほとんどん片づけてつたり、そういうのはあるってことだね。みゆきさんにすりゃ、使ってる最中のものももとの位置に戻されてるんだから、どうしたってとりだすタイミングが一瞬ずれる。それでいつつ、できあがった料理は予定とは違う味になっちゃうんだよね。そんなときにかぎって、夫と母親は、ふだんよりうまい、とか、みゆき

みつるのはじめて見た、奈緒の笑顔でした。